

ピアノを用いた吹奏楽指導法

Piano-based wind instrument instruction method

織茂 学 *ORIMO Manabu*

要約

全日本吹奏楽コンクール課題曲は、「課題曲一式」「Ⅰ・Ⅱ楽譜」「Ⅲ・Ⅳ楽譜」のいずれかを買くと、フルスコアとパート譜だけではなく、正式にコンデンススコアが同封されている。そこで今回は、なぜ私が吹奏楽指導を始めたのか、そして、吹奏楽指導にピアノを使うようになった経緯をお話すると共に、実際に2024年度全日本吹奏楽コンクール課題曲Ⅰ《行進曲「勇気の旗を掲げて」》を題材に、ト音記号とヘ音記号かつ「in C（実音）」で書かれているコンデンススコアを使い、移調楽器で書かれているスコアと比較し理解することで、管楽器の経験がなく移調楽器がわからなくても、ピアノを触った人であればピアノを使って吹奏楽指導ができる方法を提示する。

はじめに

日本全国には、小学校、中学校、高等学校、大学、専門学校を始め、職場・一般の大人が集まる団体など大小さまざまな吹奏楽団があり、音楽を専門とする学校以外、吹奏楽は授業としてではなく課外活動の一環として行われてきた。

日本の吹奏楽活動は、一般社団法人全日本吹奏楽連盟を中心とした「吹奏楽コンクール」があることにより、全国の生徒・学生始め大人まで熱心に吹奏楽活動を行うことで、日本の吹奏楽は飛躍的な発展を遂げてきた。この全日本吹奏楽コンクール（いわゆる全国大会）や東日本学校吹奏楽大会で金賞をとるとというのが大きな目標である（野球で言えば、夏の甲子園で優勝することと同じとさせていただくと納得できるのではないか）。そのために、その年の初めから最長で10月末まで、課題曲と自由曲の2曲、あるいは自由曲1曲をひと夏かけて練習する。

昨今の吹奏楽の演奏、とりわけコンクールの全国大会では、ひと夏かけて練習してきたバンドが、高い技術をもった演奏をしている一方で、音量の大小と音程、拍の縦があっているか、そして、場面ごとにメロディーを違う楽器が演奏されているにもかかわらず、全ての楽器が同じ音量で演奏すること、つまり音が出ているか出ていないかという部分で評

価されることもあり、オーケストレーションを再現する構成美が少し稀薄に感じられる。この傾向は、上位大会よりも参加団体が多い地区大会の方が圧倒的に強い。それは何故なのか。まず、地区大会は早い時期にあり、どうしても音が出る生徒・学生と音が出ない生徒・学生が同じコンクールの舞台に乗るのが現状のため、良い音が出ている学校に良い賞がつく傾向がある。全日本吹奏楽連盟の目的は、「吹奏楽及び管・打楽器による音楽の普及・向上を図り、もってわが国の芸術文化の発展に寄与すること」とされており、吹奏楽コンクールを通じて技術はもちろんのこと、質の高い音楽性の向上を目指していると推測すると、そこに注目せざるを得ないのは忸怩たる思いではないだろうか。

さて、ピアノを用いて吹奏楽の楽曲分析の解説をする人は見受けられるが、ピアノを用いて吹奏楽指導をする人はおそらくいままでいないのではないかと思う。ピアノが弾けるということは、一人で「メロディーライン」「ベースライン」「ハーモニー」「対旋律」を見極め、メロディーがいかに聴こえるようにするかを考え、音量のバランスを整えることである。ピアノでも吹奏楽でも楽器編成が変わっても音楽の作り方は一緒であると思っている私は、近年の評価が高い吹奏楽の演奏が技術や音量重視になっていることを疑問に思っている。

もう一度、音楽にとっての原点である「メロディーライン」「ベースライン」「ハーモニー」を楽譜から見つけ出し整理して、それを慣れ親しんだピアノの音で再現しながら確認・指導をすることで、吹奏楽になった時もバランスの良い色彩感豊かな演奏になり芸術的な音楽に繋がると考える。今回は全日本吹奏楽連盟より特別に楽譜の掲載許可をいただいているので、それを見ながら読み解いていきたい。

第一章 実践してきたピアノによる吹奏楽指導法について

まず、わたしがなぜ吹奏楽指導を始めたのかをお話したい。今から18年前の2007年。それはある日突然やってきた。お世話になっている吹奏楽指導者の先輩から「ちょっと手伝ってほしいことがあるから駅に集合」とだけ言われたことから始まる。当日朝、待ち合わせの場所に行き先輩と合流して移動した先は、その先輩が吹奏楽指導をしている中学校だった。

顧問の先生と生徒に挨拶を済ませると、先輩に「いまから分奏をするのでそれをみて」と言われた。「やったことないからできませんよ…」と言うと、「小・中学校でホルネット・トランペットを吹いていた経験があるから大丈夫」と言われ促されるままに、午前中は金管、午後は木管が集まっている部屋に一人で行ったが、何をして良いのかわからないので、とりあえず練習している曲を吹いてもらった。残念ながら楽譜通り吹けていなかった。合っていない音とリズムと音の長さを修正することしかできなかった。金管よりも木管の方が音は出やすいが、指使いがわからないので運指標を生徒とみながら音の確認

をするので時間がかかった。その日の指導を終えた帰りに「これから回数を重ねて経験を積みば大丈夫」という先輩の言葉を信じて、その年の夏のコンクール直前まで毎回与えられた課題を一つひとつこなしながら、分奏を中心に、時には前に出て指揮をして合奏をした。分奏を何度か行い課題をこなしていくうちに、音やリズムが違うこと以外に、音色が汚い、音が短い、音がぼやけているなどを聴き分けられ指摘することはできるようになったが、どのような言葉を使えば解決できるのか、具体的ではなく抽象的な言い方でしか指導ができず、また中学生ということで生徒に差があり、できない生徒を教えるのに時間がかかりその先までたどり着けないこともあった。やはり管楽器経験の少ない私の教え方が良くないからだろうと悩みながら導きだした答えは、一緒に譜読みをしてあげることに、1つの事に対して中学生でもわかる身近な出来事の例え話を1つだけではなく、いくつか示してあげることが大切だとわかった。尚、この時点ではまだピアノを使って吹奏楽指導をすることは意識していなかった。

時が過ぎ、ある顧問の先生に「ピアニストはメロディーも伴奏も一人でやるのだから合奏を見られませんか？」と言われたのがきっかけで合奏に同席し、指揮者の横についてスコアを見ながら聴こえてくる音に対し口頭で指導するようになった。中には、私に指揮台での指導を依頼する先生もいるが、基本は本番の指揮をするわけではないため、あまり表に立たないよう支える形にしようと考えたスタイルで、指揮のアドバイスを求められる以外は、他団体を指導する場合のスタイルとなっている。

例えば、ピアノで培った音量のバランスと各曲の場面毎とパート毎に音量の大小や音色などを始め、「とある個所が何か変だけどどのようにしたら良いかわからない」と質問を受けた場合に横から解決法をアドバイスし、先生と生徒にアドバイス前と後を聴き比べてもらう形で、どちらが良いかを選んでもらうようにしている。ほとんどの皆さんが、アドバイス後が良いとご納得いただくことが多い。

吹奏楽指導や吹奏楽コンクールの審査を務めるうちに、九州では、吹奏楽コンクールの全国大会を目指す場合には課題曲に取り組まないといけないという規定になっていると鹿児島先生からご教示いただいた。最初は課題曲も自由曲も上記のスタイルで指導を続けていたが、ある指導者の方から「吹奏楽コンクールの課題曲ってスコアセットを買うとスコアとパート譜の他に、コンデンススコアが付いてくることをご存じですか？」と聞かれ、私は恥ずかしながらそのことを知らなかった為、「先生はピアノが弾けるのだから、このコンデンススコアを使った指導ができないのでしょうか？」との話をいただいたのがきっかけとなり、ピアノを使って吹奏楽指導をすることになった。そして、2016年2月、コンクール終了後ではあったが、おさらいとして、2015年度全日本吹奏楽コンクール課題曲の講習会『ピアノde課題曲』がスタートした。

講習を準備するにあたり、自分で「メロディー」「ベースライン」「ハーモニー」を取り出してピアノを弾けば、楽曲の構成が把握できた。従って、コンデンススコアであれば、管楽器経験のない先生でも、どこがメロディーでベースラインか、ハーモニーかが確認できるだろうと思った。楽譜を見てピアノを習っている人であれば、ト音記号とヘ音記号の大譜表の楽譜なら見慣れているのでフルスコアよりも楽曲の理解も容易である。

私にとって、このコンデンススコアとの出会いによって、どんな編成の曲もピアノ曲になるということに改めて気づかされた。ここから「今まで自分がピアノのレッスンで教えられてきたことは、そのまま吹奏楽指導に活かせるのではないか」との仮説がたった。

第二章 その指導法で得られた教育的効果、課題

ピアノを使って吹奏楽指導を始めるにあたり、最初は楽譜の音とリズムを正しく読むことから始め、次に強弱記号などの楽語を反映させた音作りをした。音符は正しいものを真似することで体得できるため、ピアノで音を鳴らしそれを聴いてから実際に吹いて確かめることを繰り返し練習する。続いて楽語は、「f（フォルテ）」「p（ピアノ）」「スタッカート」「アクセント」「テヌート」「スラー」などが多く使われている。この楽語の日本語訳に対して、合奏中に先生にいわれていることの1つに「音が大きくて雑で汚い」ということがあるだろう。上記の言葉を直訳すると【表1】のようになる。ピアノも管楽器も共通の言語として使われているが、読んだままだと必ず「スタッカート」は音にならず短い空気音だけが聞こえることが多い。「アクセント」は音色と音量を考えずにただその音を強く吹くので、これも音にならず短い空気音だけが聞こえることが多い。同じように、「テヌート」は、ただ単にその音を長く伸ばすと音の質が持続されなくなるため音程が下がり、音色の良くない音が奏でられる。3つに共通することはそれぞれの動作が目的となっており、出た音が目的になっていない点である【表2】。生徒・学生を始め一般バンドの奏者のほとんどがこのようになってしまうのは何故か。自分がピアノ演奏する時にどのようにしていたかを考えると、スタッカートは軽く弾く、アクセントはスピードを持ってはっきり弾く、結果、音が短く鋭くなり、音が大きくなる、テヌートは打鍵をはっきりし、鍵盤が上がりないようにその質量を維持した音を持続させること、といったように日本語訳の動作のための手段ではなく、出る音の結果のための手段と気づいた。これはピアノで行う動作と同じではないか、管楽器の指導に応用できるのではないかと思い、早速、ピアノで音の強弱やスタッカートやアクセントを指導するのに、客観的に自分たちが出している音の真似と、出してほしい音を実践したところ、小学生から大人まで、その違いにとっても共感し、質の高いアクセントとスタッカートとテヌートを奏でることができるようになった。つまり、楽語が持っている本来の意味は、日本語訳とは違うことがあるという認識に結び付けることができる。実際の日本語訳をそのまま行動に移すのではなく、その日本語訳が

聴衆にとって自然であると感じてもらうためにはどう行動すればいいのか、という方向で指導し、それを日ごろから意識させ積み重ねていくことで、上記のような「鋭いアクセント」や「極端に短い音」等の非音楽的表現の演奏が減ることが期待できると考える。

良い音色で演奏するには「アルファベット」がキーワードになる。音は「発音→長さ→処理」の3つの工程で成り立っている。1つの音を「タン」としたときに、アルファベットに置き換えると「Tan」となり、日本語五十音の子音「T」が発音になる。その中からいくつか試したところ、音の立ち上がりとして「T」「P」「D」が適しているとなった。続いて長さ。音の長さは母音「a」「i」「u」「e」「o」の長さと音色に比例する。全て試してみたが「i」と「e」は口の中が平らになり音色がきれいでないので、「a」「u」「o」となった。最後「n」は音の処理を表す。ピアノは1つの音を弾くところのように聴こえるが、管楽器は特に最後の「n」の部分で舌で止めると、空気が止まって音が雑になる。奏者には、「Tan」や「Pun」のように子音と母音を組み合わせて発音するという意識を持たせることで、実際に舌の動かし方や口の中の開け方に僅かながら変化が出るので、欲しい音色や音の長さが奏でられた。

「f」と「p」の意味は強弱となっているが、曲によるテンポや調性の違い、音価だけではなく、同時に何個の音が鳴っているかなどによって、同じ「f」と「p」でも物理的な音量は違ってくる。例えば同じ曲でも、速くて優しい場面での「f」と、ゆっくりやさしい場面での「f」は、同じ「f」でも同じ音量にはならないので、その曲の雰囲気やニュアンスを楽譜から読み取って表現することが大切である。譜読みをする時、楽譜に「f」と書いてあれば、まずはその通りに各々奏者が思っている「f」を吹く。譜読みと同時に、曲のスコアを見て自分のパートが各場面においてどのような立ち位置なのかを把握して練習できれば良いが、アマチュアにとってそれはなかなか難しいので、個人の練習時はまずしっかり音を出し正しいリズムを体得することが大切である。その後合奏となった時に、さまざまなパートが同じ「f」でも、曲の場面によって役割が変わるので、「f」の音量に優先順位があることを説明すると、いままで自分の吹いている音でさえ聴こえてこなかったのが、いろいろなパートの音が聴こえてくるようになることでサウンドがクリアになる為、「f」のTuttiでも吹く方も聴く方もとても心地よいサウンドになるという感想をいただく。同じメロディーでも場面ごとに楽器の音色の変化がつく為、より音楽的な表現になる。自分が思う音量を勝手に吹くことは、アンサンブルの輪を乱す行為でしかないので注意が必要だ。

最後に「スラー」。これには、2つ以上の音同士の集合体＝フレーズを表すものと、音を物理的に繋げて滑らかに演奏するためのものがある。ピアノはブレスをしなくても音が出るが管楽器はブレスをしなければ音が出ない。これは大きな違いで、大きなスラーがかかっているフレーズをピアノでペダルを踏まない場合、厳密にいうと音と音の間には気が付かないくらいの隙間がある。隙間が無ければ同時に2つ以上の音が鳴っている瞬間があ

る。一方、同じ内容を管楽器で演奏する場合、「スラーは全くタンギングをしない」と思う人もいるようだが、タンギングをしないとかえって音がぼやけてしまうため、それを防ぐために、舌ではなく息タンギングを活用することで一つひとつの音がはっきり聴こえるのと同時に、ひと息なので音がぶつぶん切れることなくフレーズを保つ効果が表れた【表3】。

吹奏楽は元より、音楽を演奏するにあたりダイナミクスやフレージングはとても重要である。吹奏楽やオーケストラ等に含まれている息を使って吹く楽器は、どうしても吸った息の量によって音量にムラがでてしまうことがしばしばで、特に各楽器には出しやすい音と出しにくい音があり、フレーズの途中で音程を意識するあまり、音量が小さくなることもある。このような場面においても、私はピアノでフレーズを演奏し、良い例・悪い例を示し奏者が客観的に違いを聴けるよう指導しているが、これにより、奏者がどこに原因があって何が悪いのかに気付く有効な手立てになっている。

このように、ピアノは吹奏楽指導において「正しい音程」「明確なリズム」「豊かな表現力」を示し指導するための強力なツールである。個人練習は元より、パート練習や木管・金管分奏でも活用し、奏者が少ない練習から大編成の練習でも活用して指導をすることで、基礎部分のレベルアップに繋がり、合奏がより音楽的になると思われる。また、各記号の意味を同じ音量・音質で演奏をするのではなく、自分たちがどのような雰囲気曲を演奏しているかを考えることで想像力や感性が磨かれ、テンポや調性、曲調の違いにより度合いを変化させて演奏することができるようになる。

第三章 コンデンススコアの使い方について

フルスコアを簡略化して、「in C（実音）」でト音記号とヘ音記号の大譜表、または数段に集約された楽譜のことをコンデンススコアという。その前に、移調楽器とは何かと管楽器経験が無い方は疑問に思われるだろう。移調楽器とは、楽譜に書かれた音と実際の音が異なる楽器を指す。例えば、クラリネット（以下Cl.）やトランペット（以下Trp.）はB♭管、アルトサックス（以下A.Sax.）はE♭管などが移調楽器にあたり、これらの楽器は楽譜上では「ドレミファソラシド」と書かれていても、実際に演奏される音は、Cl.やTrp.は「シ♭ドレミ♭ファソラシ♭」、A.Sax.は「ミ♭ファソラ♭シ♭ドレミ♭」のように楽器の種類によって異なり、その楽器の管の長さによって音程が決まるため、同じ運指で異なる音がでる。まずは「in C（実音）」でかかれたピアノ譜で簡単に解説したのち、コンデンススコアについて解説したい。

【楽譜1】は、Johannes Brahms のピアノソナタ第3番Op.5 より第一楽章冒頭部である。強弱記号はト音記号とヘ音記号の段の間に1つある。ピアノを弾いたことがない人は、全

ての音が同じ「f」の音量で演奏されていると思うだろう。しかし、実際はメロディーの部分は楽譜2にかかっている線の部分がメロディーであり、一番音量が聴こえなければいけないのである【楽譜2】。メロディーと同等に同じように聴こえなければいけないのは、楽譜3に書かれている線の部分のベースラインである【楽譜3】。この「メロディー」と「ベースライン」を見つけることが、演奏するための楽曲分析であると考え。ピアニストはこの一つしかない強弱記号から「メロディー&ベースライン」と「その他」というように分け、演奏するにあたり、楽譜から瞬時に読み取り、「メロディー&ベースライン」が目立つように弾くことで、どんな曲なのかを聴衆に認識させることができる、つまり「メロディー」と「ベース」を示すことが一番大切であると考え【楽譜4】。

さて、コンデンススコアについて。このスコアは、全日本吹奏楽コンクール課題曲には、楽譜セット一式を購入すると必ずついてくる。なぜ、吹奏楽連盟がコンデンススコアをつけているかというと、おそらく管楽器経験のない先生は元より、管楽器経験者でもフルスコアを苦手とする音楽の先生でも指導ができるようにとの配慮だが、多くの学校では一回も開かれることなく棚にしまわれ、ましてや存在すら知らない人もいる。普通ならば自分で「in C（実音）」の譜面を作らなければいけないところだから、やはり教育現場と近いだけあって、指導者にも生徒にも教育的配慮がなされているからだろう。

吹奏楽やオーケストラのスコアには複雑なハーモニーや対旋律が含まれるため、それを紐解くためにも、このコンデンススコアを使うことで、楽器によって記譜の音と実際の音との違いがあることがわかるだろう。ト音記号・ヘ音記号をそのままピアノで弾けば吹奏楽曲を理解することができる。コンデンススコアからは、大きく分けて以下の3つが把握できる。

- 1) メロディーの把握
- 2) ベースラインの把握
- 3) ハーモニーの把握

これらを把握することで曲の構成がわかるようになり、スコアと照らし合わせると、場面ごとにどの楽器に何が振り分けられているかがわかる。今回の例として取り上げる吹奏楽曲は、2024年度全日本吹奏楽コンクール課題曲Ⅰ《行進曲「勇気の旗を掲げて」》を題材に、ピアノを使った吹奏楽指導の方法を提示する。

何故、ピアノを使った吹奏楽指導をお勧めするかというと、管楽器経験がなく移調楽器がわからなくても、「in C（実音）」で書かれているコンデンススコアをピアノですぐに音の確認をすることができるからである。尚、課題曲のコンデンススコアは、ト音記号・ヘ

音記号がそれぞれ1～2段、パーカッションパートが2段で書かれているが、今回は管弦楽器が中心のためパーカッションの説明は割愛する。

【楽譜5】を見ると、「A」の一番上の段には、メロディーと思われる音が実音で書かれているので、実際に歌ったりピアノで弾いたりして確認するとメロディーであることが一目瞭然である。そこには、「Cl.・A.Sax.・Trp.」と楽器名が書いてあり、【楽譜6】と照らし合わせてみると、「A」の部分の「Cl.1.2・A.Sax.1・Trp.1.2」のパートに、移調楽器の記譜で書かれた同じものが確認できる。つまり、Cl.1.2・Trp.1.2の記譜の「C」の音は実音で「B」が鳴るということがわかる。同様に、A.Sax.1.2の「G」は、実音で「B」が鳴るということが理解できると、Cl.とTrp.は、フルスコアで書かれている音階「C-D-E-F-G-A-H-C」は、実際には「B-C-D-Es-F-G-A-B」の音が鳴るということが理解できる。

続いて、【楽譜5】の「B」の一番上の段には、「A」で確認できたメロディーに「+ Picc.・Fl.・Ob.」と楽器名が書いてあるので、「A」からの「Cl.・A.Sax.・Trp.」のメロディーに加えて「Picc.・Fl.・Ob.」が加わっていると理解でき、【楽譜6】と照らし合わせると「Picc.・Fl.1・Ob.」と確認できる。そして、この曲の「A」と「B」の部分はメロディーが同じであることから、それぞれの場面で、どのメロディーの楽器をメインに選ぶ＝音量を大きく目に吹くかによって、同じメロディーでも楽器の音色が変わることで表現に幅ができる。これが色彩感に繋がる。スコアをみてもわからないところは、実音を確認できるコンデンススコアをみれば普通のピアノ曲を弾くのと同じ原理のため、音を理解することができる。【楽譜5】を見ると伴奏形は一部を除きヘ音記号の部分に書いてある。その中でも一番下の音域の音がベースラインに相当し、主に強拍1.3拍目にあることが多い。そして、弱拍にある三和音とセットで伴奏形の完成である。ベースラインは曲の一番下の音域をつかさどる、つまり曲を支える大事な土台であるので、基本的にはメロディーに対してほぼ対等な音量で演奏するとよい。

ハーモニーの把握方法は、弱拍にある三和音もスコア上の強弱記号は「mf」のため、全てのパートの音が同じ音量になりがちで、更にベースラインの音が加わることで余計に音量が大きくなり重たく聞こえるようになる。ピアノを習っている人が【楽譜5】や【楽譜7】にあるような伴奏形の楽譜を見たときに同じ音量で音を弾くだろうか。ピアノの先生からは、「メロディーが聞こえない」と、音量の指導を受けるから同じにはならない。原理は同じはずだが【楽譜6】になると、全ての音が同じ音量で鳴らしてしまい「メロディーラインが聞こえない」ということの一点に限るのである。実際にピアノで再現してみたものを聴かせると、聴いている全ての人が「伴奏がうるさい」と答える。ピアノ譜でバランスを整えているのであれば、オーケストレーションした楽譜が全て同じ強弱記号だとしても、全ての音が同じ音量になることはない。

これまでのことを組み合わせた時の音量バランスは、【楽譜5】のヘ音記号の部分が、【楽

譜 6】の「B♭ Bass Clarinet・E♭ Baritone Saxophone・Tuba・String Bass」のベースラインと「F Horn.1.2.3」後打ちを集約した形、いわゆる伴奏形というが、これを大譜表にまとめた【楽譜 7】を見ていただきたい。これならばピアノを習ったことがある方なら誰もが見たことがある楽譜だと思う。ピアノで表現する時はベースラインと三和音の一番上の音が強く、三和音の下 2 つは少し弱く弾くということが理解できる。つまり、【楽譜 6】の楽譜のように全てのパートが「mf」だったとしても、同じ音量で演奏することはないということになる。

このようにピアノを使って説明し吹奏楽指導をしてきた結果、指導校の演奏者と指揮者からスッパリした大人のサウンドになったとか、コンクールでは全国大会を始め多くの大会で金賞受賞といったように、多くの結果を残している。

第四章 ピアノを使って指導する際の留意点

ハーモニーディレクターはほとんどのバンドが持っていると思う。とても機能的で効率よく練習するのにかなり役立つものだと思う。普通のピアノとの違いは、鍵盤数が少ないことにより音域が狭いため、同時に鳴らせる音の数が限られている点である。1つのパートやセクションの音取りや音程、リズム練習はできるが、鍵盤を弾く力加減で鳴る音の音量を変えることができないため、発音による音の変化、前に述べた楽語などの音量バランスの整え、音の処理の方法などの音楽表現の練習には適していない。その点において、アコースティックピアノや鍵盤を弾いたときの音の強弱がつけられる電子ピアノに優位性がある。

ただし、ピアノがあまり得意でない場合は、どうしても片手で単旋律のみになってしまうのと、テンポに当てはまった正しいリズムで見本を示すのが難しいところがある。初見で弾ける人は良いが、何度も弾き間違えながら指導するわけにはいけないので、ある程度練習をしておく必要がある。また、ピアノにはペダルがあり、使用する場合、音同士が濁らないように音・和音によって踏み変える必要がある。指を動かすのと同時に、出ているピアノの音について細心の注意を払っていただければと思う。

第五章 まとめと今後の課題

以上、吹奏楽の指導において、ピアノは端的に見本を示すことができる有効的な楽器であることをお伝えした。ピアノが上手な方もそうでない方も、吹奏楽指導時にピアノを使うことで、口では伝えきれないものを具体的に音で示すと奏者も耳で聴くことができるので、練習効率も上がりその後の演奏に早く良い変化をもたらすことができる。加えて、楽語の意味を調べるのはもちろんのこと、その楽語の意味のようになるための行動はどうい

うことかということを考えて基礎練習や演奏に活かすと良いと思う。そして、演奏するということは、1人で10本の指を使ってピアノを弾くのと同じように、管楽器は自分1人ではあるが、1人で何人ものパートの曲を演奏しているということを想定し音量バランスを整えていくことで、どのパートもはっきり聴こえてくる仕組みであることを説明した。今後もより効果的な吹奏楽指導におけるピアノの活用法を研究すると共に、耳から聴いて覚えるハーモニーバランスの研究をしていきたい。

引用文献

- 【楽譜 1】 Johannes Brahms Sämtliche Werke, Band 13:
Sonaten und Variationen für Klavier zu zwei Händen Leipzig:
Breitkopf & Härtel, 1926-27. Plate J.B. 52. Public Domain
Piano Sonata No.3 Op.5 Satz.1 P1



- 【楽譜 2】 Johannes Brahms Sämtliche Werke, Band 13:
Sonaten und Variationen für Klavier zu zwei Händen Leipzig:
Breitkopf & Härtel, 1926-27. Plate J.B. 52. Public Domain
Piano Sonata No.3 Op.5 Satz.1 P1



【楽譜 3】 Johannes Brahms Sämtliche Werke, Band 13:

Sonaten und Variationen für Klavier zu zwei Händen Leipzig:

Breitkopf & Härtel, 1926-27. Plate J.B. 52. Public Domain

Piano Sonata No.3 Op.5 Satz.1 P1



【楽譜 4】 Johannes Brahms Sämtliche Werke, Band 13:

Sonaten und Variationen für Klavier zu zwei Händen Leipzig:

Breitkopf & Härtel, 1926-27. Plate J.B. 52. Public Domain

Piano Sonata No.3 Op.5 Satz.1 P1



【楽譜 5】 渡口公康作曲 2024 年度全日本吹奏楽コンクール課題曲
 CONDENSED SCORE I 《行進曲「勇気の旗を掲げて」》
 一般社団法人 全日本吹奏楽連盟 東京
 2024 年 2 月 1 日発行 3・4 ページ J A S R A C 出 2504549-501

行進曲「勇気の旗を掲げて」
 March "Raise the Banner of Brave"

渡口 公康
 WATAKUCHI, Tomonori

Condensed Score

March tempo (♩=120 ca.)
 High W.W., Glock.

C, A, Sax., Trp.

W.W., Brass

Brass

Hrn.

C Cymb.

B.D.

© Copyright 2024 by All Japan Band Association (Tokyo, Japan)

4 Picc., Fl., Ob. **B**

Low W.W., Low Brass

This system of a musical score features five staves. The top staff is for woodwinds (Piccolo, Flute, Oboe) and includes a section marker 'B'. The second staff is for Low Woodwinds and Low Brass. The bottom three staves are for strings. The music is in 4/4 time and includes various note values, rests, and dynamic markings.

This system continues the musical score with five staves. It maintains the same instrumentation as the first system. The notation includes complex rhythmic patterns and articulation marks across the woodwind, brass, and string sections.

This system is the final one shown, continuing the five-staff musical score. It concludes with various musical notations, including notes, rests, and dynamic markings, typical of a score page.

【楽譜 6】 渡口公康作曲 2024 年度全日本吹奏楽コンクール課題曲

FULL SCORE I 《行進曲「勇気の旗を掲げて」》

一般社団法人 全日本吹奏楽連盟 東京

2024 年 2 月 1 日発行 3・4 ページ J A S R A C 出 2504549-501

行進曲「勇気の旗を掲げて」
March "Raise the Banner of Brave"

渡口 公康
WATAGUCHI GORU, Composer

March tempo (♩=120 ca.)

Piccolo

Flute 1

Flute 2

Oboe

Bassoon

♩ Clarinet

B♭ Clarinet 1

B♭ Clarinet 2

B♭ Clarinet 3

♩ Alto Clarinet

B♭ Bass Clarinet

E♭ Alto Saxophone 1

E♭ Alto Saxophone 2

B♭ Tenor Saxophone

E♭ Baritone Saxophone

March tempo (♩=120 ca.)

B♭ Trumpet 1

B♭ Trumpet 2

B♭ Trumpet 3

F Horn 1&2

F Horn 3

Trombone 1

Trombone 2

Trombone 3

Euphonium

Tuba

String Bass

March tempo (♩=120 ca.)

Percussion 1

Percussion 2

Percussion 3

Percussion 4

Snare Drum

Hi-hat

Tom-tom

Glissando

© Copyright 2024 by J.A.S.R.A.C. (Tokyo, Japan)

4

The musical score is arranged in a system of staves. The instruments and voices included are:

- Flute (Fl.)
- Flute 1 (Fl.1)
- Flute 2 (Fl.2)
- Clarinet (Cl.)
- Clarinet 1 (Cl.1)
- Clarinet 2 (Cl.2)
- Clarinet 3 (Cl.3)
- Saxophone (Sax.)
- Saxophone 1 (Sax.1)
- Saxophone 2 (Sax.2)
- Trumpet (Trp.)
- Trumpet 1 (Trp.1)
- Trumpet 2 (Trp.2)
- Trumpet 3 (Trp.3)
- Horn (Hrn.)
- Horn 1 & 2 (Hrn.1&2)
- Horn 3 (Hrn.3)
- Tuba (Tub.)
- Tuba 1 (Tub.1)
- Tuba 2 (Tub.2)
- Tuba 3 (Tub.3)
- Euphonium (Euph.)
- Percussion (Perc.)
- Percussion 1 (Perc.1)
- Percussion 2 (Perc.2)
- Percussion 3 (Perc.3)
- Percussion 4 (Perc.4)

The score includes various musical notations such as notes, rests, and dynamic markings. Specific markings include (S.D.) and (C. Cyb.) above the Percussion staves.

【楽譜 7】 渡口公康作曲 2024 年度全日本吹奏楽コンクール課題曲
CONDENSED SCORE I 《行進曲「勇気の旗を掲げて」》
一般社団法人 全日本吹奏楽連盟 東京
2024 年 2 月 1 日発行 J A S R A C 出 2504549-501

楽譜 7 のピアノ伴奏部分の楽譜。4 行の楽譜で、各行はピアノ（p）とフルート（f）のパートが記されている。楽譜は 4/4 拍子で、キーは B -flat である。楽譜の初めには「A」という記号があり、その後の楽譜には「mf」という力度記号が記されている。楽譜の最後には「B」という記号がある。

【表 1】 遠藤三郎編 独仏伊英による 音楽用語辞典一改訂版 速度 発想 奏法
株式会社シンコーミュージック

上記楽語辞典に載っている楽語とその日本語訳

楽語	日本語訳
アクセント／accent	強調、(記号の) > ^
スタッカート／staccato	分離する、音を短く、次の音との間をあけて
テヌート／tenuto	音の長さを十分に保って
フォルテ／f, forte	強く
ピアノ／p, piano	弱く
スラー／slur	高さの異なる 2 つ以上の音符を結ぶ 弧線 (旋律のまとまりを示す)

【表 2】 楽語辞典に載っている楽語の日本語訳をそのまま受け取って行動した結果

楽語	結果
アクセント／accent	音を鋭くしすぎて汚い音になる
スタッカート／staccato	音を強く短くしすぎて音にならない
テヌート／tenuto	ただその音を伸ばすだけになる
フォルテ／f, forte	音色や音質を考えずに力いっぱい強く大きい音になる
ピアノ／p, piano	音色や音質を考えずに脱力しすぎて芯の無い弱く小さい音になる
スラー／slur	タンギングをせずに音を吹くので、1つひとつの音の粒がぼやける

【表 3】 楽語辞典に載っている楽語の日本語訳が結果になるために考えた動作

楽語	動作	結果
アクセント／accent	軽く弾むように吹く	短く切れている
スタッカート／staccato	発音、音の立ち上がりをハッキリ吹く	その音が強く聴こえる
テヌート／tenuto	発音、音の立ち上がりをハッキリした上で、音を維持する	その音に意思が生まれるから十分音が保たれる
フォルテ／f, forte	1つの物理的音量としてではなく、曲の場面に合わせて音色や音量を変える	1つの音量だけではなく、「mf」寄りの「f」や「ff」寄りの「f」など、表現に幅がでる
ピアノ／p, piano	1つの物理的音量としてではなく、曲の場面に合わせて音色や音量を変える	1つの音量だけではなく、「mp」寄りの「p」や「pp」寄りの「p」など、表現に幅がでる
スラー／slur	1つ1つの音をタンギングしなすが、音が立たないように舌ではなく息で丁寧にする	1つ1つの音がぼやけずはっきり聴こえた上、繋がって聴こえる